

美しき青春のために

伊 吹 武 彦

○司会 只今より神戸女学院創立八十周年の記念講演会を開催いたします。

先ず伊吹先生から御講演をお願いするのでありますが、難波学長に御紹介を願いたいと思います。

○難波 伊吹先生については既に皆さんが先生の著書によって十分御承知かと思っておりますので、極く簡単に申し上げます。

私事を申し上げて相済まないのですが、伊吹先生と私の家内とは幼友達でございます。家が隣り同志、小学校も一緒でございますして、非常に親しくしております。しかし親しいからというわけで伊吹先生をここにお出願ってお話して、頂くわけではないので、伊吹先生の御研究なり御著書によりまして、今回の八十周年の記念講演に相応しいであろうという意味からお願ひしたわけでございます。伊吹先生は東大の仏文科を出られまして、ソルボンヌ大学におきまして仏文を研究なされ、現在京都大学の仏文学の教授をしておられまして、非常に広い範囲、幅をもって日本の文化の為に、ある意味において世界の文化の為に活躍していらっしゃる方でございます。著書といたしましてはサルトルに関するもの、有名なボヴァリア夫人等沢山ございます。それでは只今より伊吹先生にお話を頂きます。

○伊吹 私も私事に亘って恐縮でございますが、今難波先生の奥さんと私が親しいと仰っしゃいましたが、小学校の級は私の方が上でございますして、難波先生の奥さんは私よりもお若いことを一寸申し上げておきます。

私の題は「美しき青春のために」——これは私が附けたのですが、大変いい題だと思って付けまして、さて先程京都から参ります時につくづく考えますと、いい題ではあるが、少し甘過ぎたかなと後悔しているのであります。しかし今更訂正はいたしません。只私が皆さんの青春が美しくあるようにと願う気持はこの題を附けた時から現在只今まで少しも変わっておりませんし、なお結論を先に申すようですけれども、皆さんの青春が、いろいろな意味で問題の多いこの社会の中であくまで美しくあります為には、いろいろ心構えがありましようけれども、やはり美しいものに感動するということをお忘れにならないようにと、そういう気持をもって少々甘い映画の題のような題を附けたわけであります。美しいものに感動するのは申す迄もなく結構なことでありまして、どんなに周囲が汚れておりまして美しい感動でわれわれは生きてゆかなければなりません。私も大体感動派であります。自らカンシニアンと称しております。勿論英語にもフランス語にもこういう言葉はありませんがね、兎に角ものに感心するという、いつも柔かな、素直な、いや素直というど私自慢をしているようですが、兎に角余りにひねくれて考えないで、よいものに見る、盛んに感心するという心の柔かさ、柔軟性というものを持ち続けてゆきたいと思っています。私は自らカンシニアンたることを以つて私の青春時代から今日に至る迄、そして生きるであろう最後まで貫き通す——という大げさですが、——宝物のように感激性を持ちつづけてゆきたいと思っております。この間私共の方の学生と話をしておりましたら、先生の講義は文学青年のような感激性がないと申しました。私はたちどころにカンラカンラと笑って、そういう感動は教室へ来る迄の廊下でのことであって、廊下から一たび教室のドアを開けた途端にそういう感激は捨てる、しかし廊下迄は大いに感激している。例えばスタンダールの小説を読んでも二十才の時に読んだそれよりもっと感動しているのですが、興奮をして教壇に立ったところで文学青年の世迷言をしゃべるに過ぎないから、私は学校では廊下迄感動して、後は感激の整理をするのだといって半分は冗談に笑ったことであります。兎に角廊下のところ迄は感激する、皆さんはどうか人生の廊下を感激しながら、而も美しいものに感激しながら通って頂きたいと思うのであります。そこで美しいものは世の

中に沢山あります。映画の中にも実に感動すべきものがありますし、音楽、絵画、文学、探せばいくらでもある。美しいものはお花畑程——といっては云い過ぎですが、随分あるわけです。そこで私は我田引水という大変結構な方法によりまして、私の比較的よく知っているフランス文学の中で、私自身が感動し、感激し、本当に感心しましたもののいくつかを皆さんに申し上げたい。そうして皆さんに早くいえば一種の読書案内的雑話ですな、まあ雑話です。いろいろな話を僅かな時間ですけれども申し上げたい。そうしてもし何かの機会に皆さんがそういう本をふとお読みになって感動されることを期待したい。いや実は感動しなくてもよいのです。私が、又誰かが感心したから自分も感心しなければならぬという必要は更々ないのであります。私がまだ高等学校の二年の頃で、昔の話であります、その当時哲学者の西田幾太郎先生の善の研究という難かしい本が出ました。そういう本を友達が教室の中へ持ってきて読みながら頷いているのです。ありゃ分っている証拠だと思って、自分もひそかに読んでみたが分らない。どうも分らない。あんなに頷いている友達がありながら俺には分らない。俺は頭が悪いのだろうということを思ったことがあります、自分は自分の心で、自分に与えられた感受性で、なまの感動をすればよろしいので、何も人に附いて感心することは更々ない。だから私のお話する書物についても何だ案外詰らぬとお思ひになることがあるかも知れませんが、昔のわれわれ高等学校生のような心は決してお起しになりませぬように、これが私のお話の前置きであります。

フランス文学と申ししましても実は大変なので、日本文学程古くはありませんが、もう一〇〇〇年近く前からいろいろな作家が、いろいろな作品を、いろいろな方法で書いて連綿今日に至っている、さあどれを読もうかということになると困るのでありますが、しかし大体フランス文学を通じて一つの特色があります。これは私の大好きな言葉ですが *homo sum* というのがある。これはラテン語です。 *sum* とは私は何々であるということ、 *homo* は人間ということ、 *homo sum* とはすなわち私は人間であるということです。ある古代の文学者が戯曲のなかのある人物に言わせたセリフで大変有名な言葉です。これは勿論意味深長、含みのある言葉で、人によって、時によっていろいろ解釈が違

ことになります。皆さんもこの言葉を繰返し考えながら大人になるに従って、その日その日の空の模様のようにここからいろいろな言葉の意味が汲みとれるだろうと思います。とにかく私はこの言葉が好きです。人によっては自分の書齋なり机の横にいろいろな言葉を書いて貼り付ける人がありますね、朝必ず六時に起きましようとか、勤勉とか、平生余りやらないことを気休めに書いて貼っておく。あれは余り沢山貼るとうどん屋みたいですから私はああいう趣味は余りないのですが、もし何かを自分の机に書いて貼付けるならこの言葉を貼付けたい、そう思っております。忘れないように、せめては心の壁にピンでちょいと貼付けるか、あるいは懐刀のように、お守のように持っているかしたいのです。それ程私は *homo sum* という言葉に感動し、感激し、深く感心しているのであります。フランスとイタリアの合作映画「陽気なドン・カミロ」このを御覧になった方があるかも知れませんが、その映画の筋はざっとこんなのです。北イタリアのある町で町長を選ぶという時、共産党のリーダーが当選します。ところがこの町にはカトリックの坊さんがありまして、共産党の町長とは小学校の友達同士ですが、固よりこの坊さんは共産党の町長に対してはものの考え方違いますからここに敵対関係が出来る、そこから起ってくるいろいろな騒ぎやら、経緯、あれやこれやを映画にしたものです。ある時共産党の指令によってストライキが行われる。共産党がその町の支配権を握っているものですからストライキはうまく統制がとれて、町外れの農場、牧場、一斉に仕事をやめる。そこに牛がいる。その牛の乳を搾るものが誰もいない、いや搾ってはいけないのです。皆がストライキをやるから。ところが牛は乳が張って苦しくてたまらない、苦し気に泣きます。それでも完全なストライキだから牧場の人達は働いてはいけない。方々にピケラインを張りまして、党員が厳重に見張をします。見るに見かねた司祭が、深夜苦しんでいる牛のお乳を搾りにゆこうとする。うまくピケラインは通過して牛小屋に入ろうとする鉄砲がぐっと出てくる。町長自らが大切なところを守っているわけですから。何か射合いでも始まろうとするサスペンスの一瞬なんですな。ところが双方からずっと鉄砲が近寄ったかと思うと、やがて銃口が下りてくる。敵と味方と、世界観もすっかり違う二人の影が夜目にも白く寄添って、ずっと牛小屋の

方へ近づいてゆきます。二人は牛小屋へ入り、上着を脱いで、乳が張って苦しんでいる牛の乳を搾り始めた。ものも言わないで――。二人は敵ですから……。しかし二人は申合せたように一生懸命に搾っている。やがて白々と夜が明ける。二人は疲れ、ぐったりしてふうふうしている。二人は咽喉が渴いた。そりゃそうでしょう。夜通し乳を搾って疲れたのですからね。ところで、側にはミルクが一杯入ったばけつがあるのです。二人は期せずしてミルクで乾杯をして、息をもつかずにぐっと飲む。党派を越した人間同士の乾杯です。私の申しました *homo sum* というのはそういうことなんです。これはフランスとイタリヤの合作映画でありまして、純粹にフランスのものとして申し上げたものではありませんが、フランス文学ではいつも何かそのような *homo* を目指して物を書き、その書かれたものからわれわれがいつも *homo* の香を、*homo* の悲しき、*homo* の強き、*homo* のはかなさを読み取る。そういうことによってわれわれが感動し、われわれの中にある *homo* を育ててゆくという、極めて人間的な文学なのであります。大体フランス人というのは良い意味でも悪い意味でも人間的なところが多いのです。ここにゴッパが一つあって、そこにはビールが入っているのです。そうしてそこに蠅が一匹死んで浮いているという、そういう情景があった場合に、各人はどういう反応を示すかということなんですが、イギリス人は紳士ですから黙ってもう一杯とこういう。はしたないことはいわない。ドイツ人は蠅をつまんで捨てて、そうして後のビールをぐっと飲む。ビールが好きなのか、しまつ屋なのか、理由はともあれ、そういうように如何にも着実なやり方です。ロシア人はのんびりしていますから、ものにこだわらない。そのままビールも蠅もぐっと飲んでしまふ。実際こだわらないことにかけては大したものですが、フランス人は先程良い意味でも悪い意味でも人間的だと申したとおり、コップを持って中のビールを床へ捨てて、立っているボーイを凡ゆる言葉で以て罵倒をする。フランス語は優雅な美しい言葉だといわれますが、あれは大嘘です。相手を罵倒する言葉を集めたら一巻の書物になる位ですよ。君は僕に怨みがあるのか、これでもって僕を毒殺するのか、そういうような言葉で約一分間位罵倒して、それが済むとけろっとするのですね。にやっと笑って。「おい！もう一杯」と

いのです。余り品は良くないかも知れませんが、さんざん罵倒して、それが済むとゆるっと忘れたようにボーイさんに「もう一杯」にこっとしてこういう、そういうところがあるのです。やはり何といえますか、つまり人間的な親しさをもっている。そういう国民の文学でありますから、文学作品もじかに人間の強さや弱さ、はかなさをえがくことをこそ目的としていると思われます。二、三年前フランスの偉い小説家が日本へ参りました。私共これは学生時代から愛読していた小説家です。皆さんはお読みになったかどうか知りませんが、デュアメルという名前で「深夜の告白」という小説があります。標題から考えると何かスリラーもののようですが、決してそうではありません。まさに homo のおろかしさや homo の涙もろさを書いた、人間はお互同士が homo であることを認識することによって、せめては苦しいこの世の中が渡っていきけるのだ、そういうことを書いた本なんです。「深夜の告白」というのは本当に面白い小説です。ある安サラリーマンがいました。非常に平凡な男、人の良い男、どこにでもいるような人間であります。ある日自分の事務机に向って仕事をしておりましたら、社長さんから呼出があるのです。「一寸来い」という奴なんですね。で、社長室へ恐る恐る出頭します。社長からいろいろと命令を受ける。命令を聞きながら社長の耳を見ますと、如何にも形が良い、やはりフランスにも福耳というものがあるようで、それを見てると一寸つまんでみたい気がする。しかしわれわれはやはり常識とか、いわゆるエチケットとかいうものがあるので、そういう場合、つまんでみたいなどそこはかとなく思うけれども止める。しかしこの主人公はいい耳だな、つまんでみたいなど思って本当にちよいとつまんでしまう。社長は烈火の如く怒って彼をくびにします。くびになった彼は自分の家に年とったお母さんがいるのですから、くびになったとはいいかねて、毎日パリの町をほっつき歩いて職はないかと探します。ところが、パリの町の、マロニエがぼっぼっぼと生えている歩道を歩けばよいのに、彼は歩道と車道の境目の一線を劃しているあの上を歩くのです。両方のポケットに手突込んで、別にそういうところを歩かなくてもよいのに歩く。皆さんにもそういう本能はあると思いますが、ガス燈のところまで敷石の上を一步一步歩きながら、向うへ行く迄にこの敷石の数が偶数なら今日

は職が見付からない、奇数なら見付かる。そういうジンスミたいなことを考えながら歩いてゆく。偶数だ、見付からないとなると公園かどこかへ行って遊んでいる。この男がある夜、酒場でデュアメルにいろいろなことを告白するというのが小説の荒筋ですが、これは殆んど筋も何もない小説ですが、しかもしみじみとした人間的なものなんです。デュアメルが日本へ参りまして、講演そのものは実は余り評判はよくなかった。日本人というものをどうもびったり掴んでいなかったの、デュアメルも毫碌したものなどといわれておりましたが、しかし私は幸いにしてデュアメル氏の毫碌しない風貌に接することが出来た。京都に日仏学館というフランス政府が経営している インスティテュートがあります。そこへデュアメル夫妻が訪れて参りました。そのサロンで私共じかに話をする機会を得ましたが、デュアメルの奥さんというのは昔女優でありました。今世紀の始め頃、一九一〇年代にジャック・コボーという有名な演出家がおりました。そのお弟子にルイ・ジューベ、シャルル・デュランというのがおりましたが、そういう人達と一緒にやっております夫人ですが、デュアメルが「さて皆さん今日は家内を連れてきておりますので詩の朗読をさせたい」というので夫人は四、五篇の詩を朗読しました。さてその後でデュアメルが起上って、「極く最近エリユアールという詩人が亡くなった」というのです。エリユアールという人の詩はお読みなった方は少いと思いますが、『万人の為の詩』という非常に美しいものがあります。元はシュールレアリスムで、訳の分らない詩を書いておりましたが、今次大戦中には極めて美しい抗戦詩を書きました。ところでデュアメルはいうのです。「最近エリユアールが亡くなりました。彼は昔は私と非常に仲が良くて自作の詩集などもよく送ってくれた。最近思想が違ってきた。エリユアールはコミュニストになつて私とは政治的意見が合わなくなった。しかし、彼エリユアールは立派な詩人だ。だから家内にこれからエリユアールの詩を一篇朗読させます。」デュアメルは政治的意見はどうであらうとも、その後の友情の蹟きはどうかともそのエリユアールの詩の一篇を聞かせようというのであります。その詩は——今日はテキストを持ってきましたでしたが——実は自由の為の詩であります。「私の小学校の机の上に私はその名を書く。壁の上にその名を書くのだ、野

原の草の上にその名を書く、空の上にもその名を書く……」ということとでずっと続く。で最後に「リベルテ」とあります。つまり「自由」という名をいたるところに書くという詩です。「その名を書く、その名を書く」それがずっと続いて、あとにリベルテと読みました時、デュアメル夫人はまるで自由の女神のような恰好になりました。私は実に感動したので。しかし私は詩そのものに感動しただけではありません。老いたるデュアメルが、いまは敵である古い友人の詩を読ませたということに私はなおさら感動したのであります。だいたいいま申したようにフランス文学は、強い、そして弱い、人間を書いております。皆さんもフランス文学の作品を読まれる機会があったら、どうかそこにありのままの人間の姿を読みとっていただきたい。ありのままが深く深く書かれておるときに、そこから *homo sum* の感動が皆さんの胸にわいて来るだろうと思います。まず古いところで十六世紀、この時代にはもう人間の声がナマにきこえて参ります。何といいましても中世時代では、人間の声がそのままに、屈折しないで素直に、伸び伸びと、すがすがしく響くということは少いのであります。ところが十六世紀になると、ルネサンスの時代です。ルネサンスとは再び生れるということ、人間の声にも生れ変わったようなナマのものがきかれるのです。全部お読みになる必要はありませんが、モンテーニュの『エッセー』をひもどいて下さい。ほんのちょっとしたでも、おみくじでも引くようにパツと開いて二、三行でも読んで下さい。この本の中にはあまり肩をこらすなということが書いてあるようです。これはわれわれ日本人には一番いいことで、私どもはむきになってよく肩をこらします。もう少し柔らかな気持ちで、柔軟な考え方で話し合えば直ぐに分かることを、むきになって闘わなければならぬ。そういうものに対しての解毒剤を沢山含む書物であります。モンテーニュは語るとみえて語らず、語らずとみえて語る人です。例えば思い上りについてという題で書いているところを見ても、必ずしも思上りのことだけを書いてはいません。脇道のようなところ、無駄話のようなところが沢山あります。然しそのウネウネした話をたどってゆくと結局は肩がほぐれます。ほぐれたところで *homo* がみごとに説かれておる。この本は機会のある時にお読みになることを切にすすめしたい。「人間は波打つ存在である。」これはこの本の

中にある有名な言葉です。人間は波動する存在である。ある時には悲しみ、時には喜ぶ、然し全体を包んでいるものは人間である。悲しいからといって悲観してしまつてはいけない。喜びはまたやってくる。——というように、心の塊を次第にほぐしてくれる書物であります。こういう有名な書物をあげてくると切りはないのでありますが、十七世紀に移りますと、やはりモリエールなどという作者は偉いと思います。イギリス人がおれのところにはシェークスピアがいるという、フランス人はフイと肩をそびやかして、私の方にはモリエールがいるという位で、喜劇作者としては全く偉いです。『人嫌い』という五幕の作品があります。私の先生である辰野博士の訳では『孤客』となつています。結局人生を独り淋しく旅する人という意味からでしょう。『人嫌い』私をして言わしめれば、すね者ということになりましようかね。主人公は、正にすね者なんです。世の中のことが腹が立って、腹が立って仕方がない。つまりこれは初めから肩をこらしておる人間なんです。モリエールはこれを笑おうとしているのです。兎に角初めから怒って出る。十七世紀ですから宮廷生活が基本になる。貴族の平生の生活というものは、虚礼虚飾といえますか、挨拶をしますのにも大変だったらしいです。今なら手をあげてちよいちよいとやっておけばいいが、その時なら両手をひろげて肩を抱いて、十年の知己のようにしていて、さて別れてから、おい、あれは誰だいと人にきくような始末です。それを見て主人公は腹が立つのです。とにかく幕があいた時からブンブン怒って主人公が現われる。あとから常識人が一人ついて来る。まあ怒るなというわけです。なだめればなだめるほどその人は怒るのです。主人公はそのような当時の虚礼虚飾に対して憤慨しているのですが、何とその社交界で一番コケットといわれている或る女性に心から恋をしておる。これは妙なことです。ね。虚礼虚飾がいやならば、全く誠意もない女を愛するということは妙なことです。にも拘らずどうにもならない思慕の情を燃やす。矛盾していることは勿論であります。ところがこの女性は数多くの公爵や伯爵に同じような態度を見せた。或る日のこと一人の公爵が、僕はこういう手紙を貰ったというのです。見るとこのパリの社交界広しといえどもあなたほどの紳士はないというのであります。ところがこれはAさまあなたこそは、Bさまあなたこそはといったよう

にそれぞれほめていて、総合すると結局皆ダメだということが分るのです。皆は憤然として帰ってゆくのです。その後でただ一人残っておるのはこの人嫌いの主人公なんです。彼の愛情は極めて誠実な、如何に裏切られようとも去ろうとしません。それから幕がいろいろ移りまして、結局虚礼虚飾のパリを私とともにどうか去って下さい。そうして誠意が生きる国へ行つて暮しましようというのです。すると彼女は、「私はまだ若いのです。」という。それを聴いて主人公は、はじめでもうダメだと思ふのですね。そこでこの主人公は席を蹴って起ち上つて私は沙漠へ行く、人間の真実が生きる沙漠へ行くのだといつて舞台の下手へ行つて幕がしまる。つまり彼は右手から怒つて出て来て、最後に真実を求めて左手へ去つて行くのです。この芝居はモリエールが人間の肩をこらした狭い考え方、虚礼虚飾、これを世の中の習慣だと一応認めないで頭からかたくなに斥けようとした男を笑つたのです。ところがモリエールの人間を見る眼があまりにも行届いたために、その人間の持つておる本当に悲しい矛盾、つまり理論的にいえば、最も憎むべき社交婦人に対して最後まで、つまり他の人が去つた後までも愛情を持つつという、人間の悲しさを掘り当てたのです。だからこの芝居を見ますと笑いますよ。然し見ております間に孤客の持つてゐる悲しさがやはり同時に分つて来ます。homo というものが持つてゐるどうにもならない矛盾、それをモリエールは『すね者』の主人公のなかにびたつと描き出したのです。もっとも、その作品は古いものですから、お読みになつても身近かに感じられないかも知れませんが、然しそれにもかかわらず読んでいただきたいものの一つです。十八世紀なら例えばルソーについて、十九世紀なら例えばスタンダールについて、現代なら例えばジイドについて、申せば切りがないほどであります。ジイドの『狭き門』は多くの方々が愛読しておられるのでありますが、然しほかにもジイドは随分沢山の本を書いてゐます。それらの本によつてもわかるように、ジイドは一生を通じて煩悶もし、苦しんで、結局一種の人間主義者として死んでいったのですが、あの人の言つた言葉で、homo sum の次にもし掲げるならば、私は次の一句を掲げたい。それは「各人はそれぞれの pente (傾斜・斜面) に従うべきである」というのです。人間は決して同じであつてはならない。それぞれの姿を持つべきである

ということをいっただけです。各人は自分のパーセントに従うのがよろしい。自分のおもむくところに従うがよろしいというのですが、しかし、パーセントに従うというと、普通は水が高いところから、低いところに従うという連想から、めいめいの心の傾きに從って流れ下ればよいという意味になりそうですが、ジイドがいおうとするのはそうではない。その証拠に、ジイドは先の一句に附加えて、「*mais en montant* (しかし上にむかって)」と書いています。傾斜に從ってゆくのであるが、然し上に向って上りつつ從ってゆくということです。これはパーセントという言葉の逆手に使ったのです。若いころから何十年も書きつづけて参りましたジイドの全作品を通じていえることは、何時も彼自身、彼のパーセントに從って行った、しかも何時も上に向っていったという一点です。柔軟な精神を持っている皆さんが、精神を美しくあらしめるために美しいものへの感動をお忘れにならないようにと申しましたが、大体皆さんは *homo* の一人でいらっしゃるには違いないが、然し本当をいうとまだ *hom* である。人間になる途上におられる。最後の *o* をこれから書いてゆかなければならん。せめてこの最後に書く *o* が一層美しく完全に高くありますように、私は切に切に願うのであります。それではこれで……。